

方丈記

A

行く河の流れ



鴨長明像(伝土佐広周筆)

行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。

たましきの都のうちに、棟を並べ、甍を争へる、高き、いやしき人の住まひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。あるいは去年焼けて今年作れり。あるいは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、わづかに一人二人なり。朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、いづかた

より来たりて、いづかたへか去る。また知らず、仮の宿り、誰がためにか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その主とすみかと、無常を争ふさま、いはば朝顔の露に異ならず。あるいは露落ちて花残れり。残るといへども朝日に枯れぬ。あるいは花しほみて露なほ消えず。消えずといへども夕べを待つことなし。

B

出典 『古典Ⅰ 方丈記』株式会社大修館書店 平成19年3月 40～41頁

不請阿弥陀仏三遍申してやみぬ。時に建暦の二年、弥生のつごもりごろ、桑門の蓮胤、外山の庵にしてこれをしるす。

三 西暦二二二二年。
二 「桑門」は沙門に同じ。沙門は出家して仏道を修行する者。
一 「蓮胤」は長明の法名。

出典 『日本古典文学全集27巻 方丈記』株式会社小学館 神田秀夫校注訳 昭和52年7月 49頁

■方丈記 随筆。作者は鴨長明(一一五五?—一二二六)。建暦二年(三三)、日野山(京都市伏見区)に結んだ一丈四方(約三メートル四方)の草庵で書かれた。平安末期の京のありさまや、隠者としての生活などが描かれている。長明は、法名、蓮胤。賀茂神社に付属する河合社の禰宜鴨長継の二男として生まれ、後鳥羽上皇のもとで和歌所の寄人となつたが、まもなく出家した。ほかに「無名抄」「発心集」などがある。本文は、『新編日本古典文学全集』によつた。

①うたかた 水のあわ。

②かつ消え、かつ結びて 一方では消え、一方ではできて。

③たましきの 玉を敷いたように美しい。

④棟 屋根の中央の、もつとも高く、水平になつている所。

⑤甍を争へる 棟瓦の高さを競いあつている。

⑥仮の宿り はかないこの世の、ほんの一時的な住居。

⑦無常を争ふ 無常であることを競争しているように、どちらも滅び去っていく。

注意
*当日使用したレジュメとは異なります。